琉游舎 Ryu Yu Sha Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 133号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3
2022年6月15日発行

目には青葉 山ほととぎす初鰹

○江戸時代の俳人山口素堂の句です。ちょうど今頃の季節。初夏の風物詩を3つ挙げています。目には初夏の青葉が爽やかに映し出されます。耳にはほととぎすの鳴き声が聞こえてきました。夕餉には初鰹があれば申し分ありません。江戸っ子には待ち遠しい季節だったでしょう。

○コリーナでは初鰹以外の二つは探さなくても向こうから目と耳に入ってきます。枯枝も気がつくと今では目に痛いくらいの緑です。ほととぎすも当初の鳴き方はぎこちなく本当の鳴き声か迷いましたが日増しに上手になり、今ではうぐいすとともに私の朝の目覚まし時計です。

○この句には青葉とほととぎすと初鰹と季語が3つあります。普通は季重なりといい2つ以上の季語は掟違反とされているようですが、名句として300年以上伝えられています。俳句の講釈はさておき、私はこれは俳句ではなく宣伝文句、いわゆるコピーライティングだと考えます。

○江戸時代のこの時期はどこにいても青葉とほととぎすの鳴き声は誰にも平等に、無料で手に入ったはずです。しかし初鰹だけは全く別です。日本橋の魚河岸に出向いて初めて手に入ったのではないでしょうか？希少価値の初鰹に人が殺到し益々値段はせり上がったことでしょう。宣伝文句で飛ぶように高値で売れる初鰹に河岸の旦那衆の高笑いが聞こえるようです。

○初鰹がもてはやされたのは、季節感と希少価値がマッチして購買意欲をそそったからですが、何よりも初鰹が文句なく美味しいというエビデンス（根拠）があるからこその広告効果です。

○広告は人を幸せにするもの。その幸せが語り次がれた証拠が「目には青葉山ほととぎす初鰹」の句です。根拠なき広告はプロパガンダです。でっち上げで操られたれた人々には憎しみと不幸の連鎖が訪れます。広告は民衆を幸福にしますが、プロパガンダは民衆を不幸にし権力者を肥え太らせます。街が破壊され支配地域が拡大するごとに、クレムリンの奥に鎮座する男の高笑いが聞こえてきます。

6・7月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			16 映画会 13時半	17	18	19
20	21	22	23 映画会 お休み	24	25	26
27	28 読書会 13時半	29	30 映画会 13時半	7月1日	2	3
4	5	6	7 映画会 お休み	8	9	10 写経会 13時半
11	12 読書会 13時半	13	14 映画会 お休み	15	16	17
18	19	20	21 映画会 お休み	22	23	24

読書会
6月28日(火)
7月12日(火)
13時半
法華経2回目の読書会を行っています。テキストはご用意いたします。

写経会
7月10日(日)
13時半

映画会
不定期の開催となり ご迷惑をおかけします

狂言綺語…ありのまま

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

夏に向って私の寝覚めは鳥の声と伴にあります。梅雨の晴れ間の朝は4時前から鳥の囀りに目をさましてしまうことがよくあります。本当は涼しいうちに起き出して畑作業をすればよいのですが、頭で考えているだけのことで体が動きません。そうこうしているうちに目覚ましだったはずの囀りがいつの間にか心地よい二度寝を誘っていました。もう一度眠りにつける幸せは、暑いさなかの草取りも苦にならないほどの至福です。

3月になるとウグイスの鳴き声が聞こえてきます。最初は下手な鳴き方でなかなか鶯らしい囀りになりません。それでも毎日のようにホーホケキョと練習を続けている内に、いつの間にか立派な鶯の鳴き声です。繁殖相手を引きつけるためか、自分の縄張りを主張するためか私には分かりませんが、練習の成果を競うように梅雨のこの時期は私の枕の四方からホーホケキョが聞こえてきます。よく聞くと音程も長さも微妙に異なる鳴き声です。何羽の鶯がいるのかと耳を澄ましているうちに、ついに目が冴えて眠れなくなりました。

ほととぎすも練習によって鳴き声が上手になっていく鳥のひとつです。5月の終り頃から私の耳に聞こえてくるようになりました。最初の頃は「キョッキョッ キョキョキョキョ!」とけたたましく聞こえるだけですが、２週間も練習し続けている内に「テッペンカケタカ」と聞こえるようになってきます。しかし早朝や夜にも突然鋭く高い声で鳴くほととぎすは、鶯のように可憐優雅な鳴き声で目覚めを心地よく誘うというよりは、安眠を唐突に襲う妨害者です。調べるとほととぎすは渡り鳥でした。冬はインドなどで越冬し5月になると日本に渡ってきます。夏鳥として飛来するには少し時期が遅いのは、主食が毛虫なので早春に渡来すると餌にありつけないことと、托卵の習性のため対象とする鳥の繁殖に合わせる必要があるためです。繁殖に際し、営巣、抱卵、雛の世話を自分で行わずに、ほかの鳥に親代わりを任せる、抜け目ない、図々しい習性の持ち主なのです。しかも仮親に指名される鳥が鶯なのです。私が耳にする鶯もほととぎすの声も、各各が生きていくための鳴き声と想像はつきますが、あれほど健気に囀り続ける鶯の雛が孵った時に、それが自分の子供で無いと分かったショックはいかばかりか、それをありのままと言うには躊躇を覚えずにはいられません。

ほととぎすは平安の昔から和歌によく読まれていました。百人一首に収録されている有名な歌に「ほととぎす　鳴きつる方を眺むれば　ただ有明の月ぞ残れる」があります。「ほととぎすが鳴いた方を眺めやると、姿は見えずただ明け方の月が淡く空に残っているばかりだった」というような意味でしょうか。姿は見えなくともその声の余韻と残された有明の月にほととぎすの確かな存在が感じられます。おそらく平安時代の歌人は托卵の習性をもつ渡り鳥だとは知らなかったと思います。初夏になると山から下りて晩秋に山に戻っていく鳥に冥界や自然の大いなるもののイメージを重ねたり、明け方の時を告げる声に逢瀬の別れの時やなごり惜しさを仮託して読まれるような題材だったようです。ほととぎすはその姿を人前にほとんど見せない鳥です。見えないからこそ想像力を拡げ情感を込めるにはふさわしい存在だったのでしょう。有明の月にほととぎすを観ることのできることが、平安時代の人々のありのままのほととぎすだったのではないでしょうか。

私が「ありのままに観る」という時、それは縁起の法則によって世界を如実に観ること、仏教用語でいえば「空」「諸法実相」「真如」。これを言葉で語ることの困難さとそれは信と行によって可能となるものであると私はこの場で何度か語ってきました。今私はほととぎすの托卵という生態を知りました。鶯はほととぎすに托卵された卵が孵化したときも、疑うことなく自分の子として巣立ちまで育て続けるのです。そのうえ先に生まれたほととぎすの雛が鶯の卵を巣外に捨て去るために鶯は自分の子を残すことができないのです。これが今私の知るほととぎすと鶯の生態知識です。しかし知識は宇宙の真理（真如）ではありません。今ある知識は次の知識を要求します。例えば自分の子供を育てられない鶯はいずれ絶滅してしまうのではないか、しかし未だに鶯の声が聞こえるということは何らかの戦いや調整が2つの種の間で繰り広げられているのだろうか、それは各各の生態のどの部分が如何に作用した結果なのか、その細部へと分析を重ねた知識が世界認識を可能にすると考える人達が科学者と呼ばれる人達なのでしょう。主体である人（我）が客体である対象物を分析（客観化）する試みです。誤解を恐れずに言えば、世界は人間による分析が可能と考える立場です。一方、ありのままに観る者（信行者）は世界は不可思議（ありのまま）であり、それは仏の智慧だけが知ることのできる世界と観る者です。私（主体）も対象の実在（客体）もありのままの世界では「空」なのです。

私とほととぎすと鶯は、宇宙の真理の中では関係性（因縁縁起）によって生かされている存在（空）です。ありのままに観ると言うことはこの関係が動き出すと言うことです。私が鳥の声で早朝目覚めるという関係性が、その日の私の信行を導いていきます。これを私はありのままに観てありのままに行うと言います。この導きが私を安らぎの処に進む道と信じているからこそ、私は日々をありのままに観ることに委ねることができるのです。平安の歌人も明け方のほととぎすの鳴き声をありのままに聞いたからこそ、宇宙との交歓を歌にして残すことができたのだと思います。托卵の知識は仏との感応道交の必要十分条件ではないのです。

夏を過ぎ10月頃になるといつの間にか鶯もほととぎすの声も聞こえなくなってしまいます。外敵に襲われないようにひっそりと冬ごもりしている内に鳴き方を忘れてしまったのか、春になって私たちが再びその声を耳にする時は、また振り出しに戻ったようにゼロから鳴き方の練習を始めています。学習効果がないといえばそれまでですが、2つの種はまた来年の今頃、例年と変わらず、托卵と他人の子の抱卵と世話の関係を続けながら、私に朝の目覚めの時を告げてくれることでしょう。

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp